28年12月歴文座学　資料

平城宮跡保存の原点を探る―北浦定政と棚田嘉十郎を中心として―

2016.12.20　　岩本　次郎

1　北浦定政の生涯

文化 14(1817), 3,30　大和国添上郡古市村（現奈良市古市町）の、藤堂藩の掛屋の子として出生。

天保　3(1832), 3,25　父政俊死す。5月4日、古市城和奉行所の銀札方御雇手代として出仕。

9(1838)～　和歌・国学を富田泰州・本居内遠・中村良臣らに学ぶ。また勤王思想の影響から山陵研究を志す。

嘉永 元(1848), 6　『打墨縄』（大和国所在御陵の位置考証）刊行。

5(1852),12　地割と文献から平城京条坊については『平城宮大内裏跡坪割之図』、大和国条里に関しては『大和国古班田坪割略図』を著わす。野帳に「足」・「車」の記載。

文久 3(1863), 1,17　藩士,御陵取調御用係となる。翌年～慶応元年(1865)、光仁天皇陵・春日宮天皇（施基親王）陵の修補。明治元年(1868)8月、中風を発す。

明治 4(1871), 1, 7　中風の再発にて没す(55)。

（注）　北浦定政については、拙稿「光仁天皇陵に参拝して思う二，三のこと」『ネイチャーなら』第129号(2012.10)、「北浦定政の辞世の意味」同誌第169号(2016.2)でも触れているので参照されたい。

図1　北浦定政

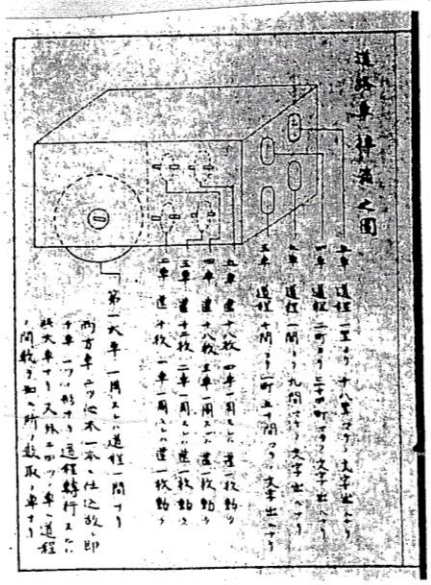


図2　道路車棹箱之図

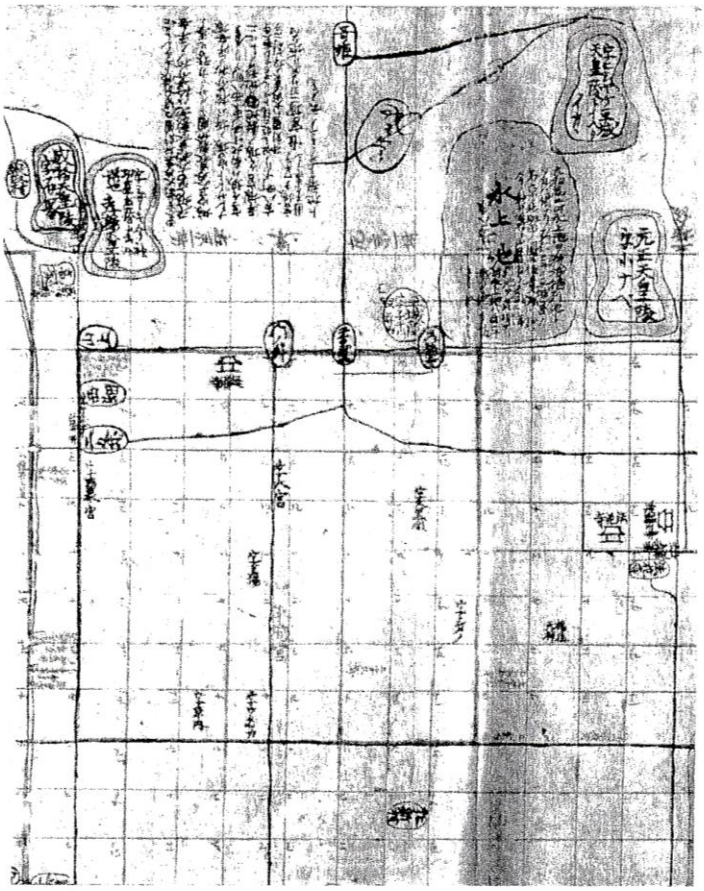


図3　平城宮大内裏跡坪割之図

2　棚田嘉十郎と平城宮跡との出会い

万延 元(1860), 4 ,6　棚田嘉十郎、大和国添上郡須川村（現奈良市須川町）に生まれる。

明治 18(1885), 1,20　奈良の高畑町に出て、木挽き業を営む、その2年後、東笹桙町に移住、苗木植木職を営む。＊観光客に奈良の都の場所を法華寺「御所」と教える。

29(1896), 冬　都跡村字佐紀の山下鹿蔵に、「大黒の芝」などの地名があることを教わる。

12,11　山下鹿蔵の案内で大極殿跡に立つ。奈良朝の皇居跡が施肥の場と化しているのを慨嘆。帰途、定政の養嗣子義十郎に会い、「平城京図」の存在を知る。

12,25　嘉十郎宅に義十郎が訪れ、同図を手渡す。嘉十郎は同図を印刷、平城宮跡を尋ねる人々に配布。

32(1899),11,18 妻イエと共に笠置山に行楽。後醍醐天皇行在所の整備状況を見て、平城宮跡の保存を志す。

33(1900), 1, 1　関野貞「古の奈良　平城宮大極殿遺址考」を『奈良新聞』に発表。

2,18 嘉十郎、関野貞に会い、宮跡保存の運動に関する協力の言を受ける。

この後まもなく「平城京図」の複製、古瓦、春日扇などを陳情の際の引出物とする。

3　保存運動の推移と史跡指定

明治 34(1901)、4, 3　岡島彦三・戸尾善右衛門ら大極殿跡に標木を建てる。嘉十郎、楓13本・桜2本を植樹。

5,11　嘉十郎、奈良来訪の小松宮彰仁親王から宮跡の保存について激励される。

11　嘉十郎、山下鹿蔵の紹介で、神戸三宮に溝辺文四郎を訪ねる。

35(1902), 1,18　県会議員青木新治郎、都跡村村民に宮跡保存の意義を演説、その後、有志に宮跡保存会の設立と平城神宮の造営を提案する。

2　平城神宮建設会の会長に生駒郡長が就任するも、約4か月後に辞任。

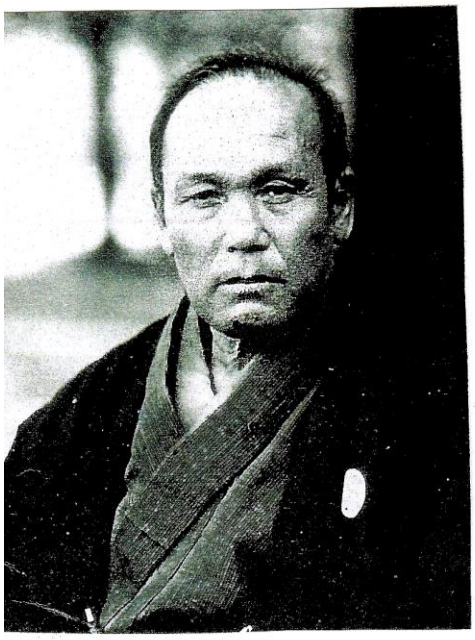


図4　棚田嘉十郎

図5　棚田イエ

図6　溝辺文四郎

36(1903),3,1～7,31 嘉十郎と文四郎、暇を見つけては第5回内国勧業博覧会（大阪天王寺公園）の入口で、来場者に平城宮跡の案内図を配布。

7, 7 水門町の陸軍少将（のち中将）大久保利貞、宮跡保存趣意書を作成。

22 宮内大臣田中光顕、北浦義十郎の案内で嘉十郎宅を訪ね趣意書に署名捺印。

8,30 嘉十郎、高畑町の土方直行（小楠公社宮司、元土佐勤王党）の紹介により、伯爵土方久元を訪ね、平城神宮建設会の総裁になってもよいとの賛意を得る。これが初上京、以後、しばしば上京、公爵二条基弘ほかの華族の賛同を得る。

37(1904), 2,10 日露戦争勃発、運動は一頓挫を来す。この頃から翌年春にかけて、度重なる上京のため、嘉十郎の家庭経済は窮乏、栄養不足からくる家族の病気相次ぐ。

38(1905), 3,30 子爵岡部長職来県、嘉十郎面会、平城神宮造営請願書の帝国議会への提出を助言、翌日、嘉十郎の案内で大極殿跡に立つ。翌月、県から楓1000本(60円)の注文を受ける。6月12日、日露講和成立。

39(1906), 3 平城神宮造営の議会請願に上京、戦後の案件処理優先のため、却下され、20日に帰路につくも所持金2円60銭、国府津まで歩く（新橋―奈良、約5円）。

7 平城宮址保存会（会長、奈良県書紀官楯石驥一郎）が組織されるも進展なし。

40(1907),11, 8 久我通久侯爵、宮跡に八重桜・楠を手植えの後、溝辺邸にて和歌を染筆。

43(1910), 4,20 宮内省より、御下賜金300円を奈良県に交付。6月、知事に若林賚蔵就任。

11,19 奈良県・市・生駒郡の連携により、平城奠都千二百年紀念祭と建碑地鎮祭を開催（19日 青年大会、20日 紀年祭・地鎮祭、21日 春日野運動場開場式）

44(1911), 3 棚田、知事の提案で上京、岡部子爵の仲介で徳川頼倫侯爵らに会う。

6, 2 岡部司法大臣、大極殿跡を視察。棚田は「天王寺」から同車。知事ら出迎え。

45(1912), 3 「平城宮大極殿跡　西乾是より二十丁」の道標建立。7,29 明治天皇崩御。

図7　小松宮彰仁親王

図9　岡部長職子爵

図10　徳川頼倫侯爵

図11　棚田嘉十郎がJR「奈良」駅前に建てた道標

図8　小松宮彰仁親王揮毫

大正元(1912),10,19 徳川頼倫、大極殿視察。知事・棚田・溝辺出迎え、関野博士説明。

2(1913), 2　奈良大極殿阯保存会（会長徳川頼倫・幹部岡部長職）が結成される。

3(1914), 3,25　棚田、脳充血で入院。7,24 から殆ど失明状態、家計逼迫。

4(1915), 4,24　棚田、眼は良くならないまま退院。

11,10　大正天皇即位大礼の儀、京都御所で執行。翌日、徳川より見舞金 10 円届く。

13　徳川頼倫、朝堂院大極殿阯を顕彰するため、大倉喜八郎らと実情視察。

12, 9　保存会、寄付金 12,961 円 96 銭 5 厘をもって、田 2 町 5 段 3 畝 29 歩を購入。

14　都跡村有志、字佐紀の原野（芝地）4 段 7 畝 26 歩を保存会に寄贈。

6(1917), 1,17　匿名寄付を申し出た宗教団体代表と上京、頼倫に面会。

2,14　棚田・溝辺が上記団体大阪事務所代表 2 名と会い、匿名を確認、満足する。

7(1918), 7,17　盟友溝辺文四郎没(67)。団体の買収地は翌年末で、6 町 6 段 8 畝 25 歩となる。

8(1919), 1, 7　棚田、宮跡買収地の登記名義が団体の代表者名のままであることに疑問を呈する。以後、名義を知事か大極殿阯保存会に切り替えるよう抗議は数次に及ぶ。

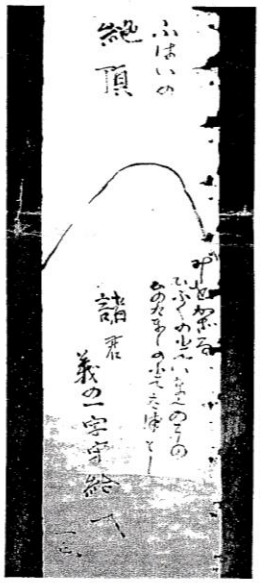
10(1921), 6,17　棚田、「この責任を如何に償ふべきか進退窮る所」との書簡を、奈良県社寺主任御中あてに出す。＊口述筆記『追親王跡去昇天我父之経歴』ここで終了。

8,16　棚田、妻子を墓参に出し、奈良市大豆山町の自宅で自刃(62)

11(1922),10,12　平城宮跡のうち、第 2 次朝堂院跡 9 町 7 段 20 歩を含む宮域東半部が史蹟名勝天然紀念物保存法による史蹟に指定される。

12(1923), 4, 3　『奈良大極殿阯保存会事業経過概要』発刊される。

5,12　徳川頼倫ら宮跡に出席、保存紀念碑除幕の後、保存会の事業修了式を行う。



「みをかざるいふくの光はなんのその心のたましの光たつとし」

図 12　嘉十郎の辞世

図 13　平城宮跡　史蹟となった地区だけが整備されている（昭和 35 年頃の航空写真）

参考文献

坪井清足監修 岩本次郎・舘野和己編『平城宮跡保存の先駆者**棚田嘉十郎の足跡**』(棚田嘉十郎翁・溝辺文四郎翁顕彰会、1991)

奈良国立文化財研究所編『**北浦定政関係資料**』(奈良文化財研究所史料第 45 冊、1997)

奈良文化財研究所編『**明治時代平城宮跡保存運動史料集**—棚田嘉十郎聞書・溝辺文四郎日記—』(奈良文化財研究所史料第 87 冊、2011)